

文化論集第55号  
2019年9月

## 「周作人国際学術シンポジウム」 特集号刊行にあたって

さる2018年7月6日より8日に早稲田大学において「第一回周作人国際学術シンポジウム——基本資料の発掘と整理」（科研費・基盤研究C「周氏兄弟と『新青年』グループ17K02651」）を開催した。今回の特集号はシンポジウムでの発表論文を中心に構成するものである。

周作人は、中国近現代文学に大きな足跡を残した文学者である。陳独秀による文学革命の提唱に応え、文学評論「人間の文学」（1918年）を発表し、人間とは本来霊肉一体の存在であり、本来の人間性に基づいた人道主義文学を目指すべきだと主張した。この理念は伝統的儒教道徳を批判する有力な根拠となり、兄魯迅の小説「狂人日記」、「阿Q正伝」とともに中国近代文学に実質的裏付けを与えるものとなった。



周作人（1885～1967）

周作人の該博な知識は文学にとどまらず、民俗学をはじめ、性心理学、人類学、ギリシア神話、日本の落語、川柳に至るまで深く広いが、その核心にあったのは明治末期の日本留学時代に出会ったハヴロック・エリス（Havelock Ellis, 1859年～1939年）の書物から学んだ性心理学であった。エリスは性愛の視点から見た人間の实相を若き周作人に示し、衝撃を与えた。終生変わらぬ勤勉な読書を支えたのも、道徳的虚飾ぬきに人間の实相を解明するという情熱にほかならない。

その意味において周作人の学識の基盤は日本留学時代に培われたといえる。零落した旧家に生まれ、給費生として入学した江南水師学堂（海軍学校に相当する）で英語を学んだ後、兄の後を追って1906年に来日した。日本では、欧米文芸思潮だけでなく、日本の白樺派など新しい文芸思潮まで幅広く涉猟した。1909年に日本女性羽太信子を妻とすると、日本の伝統文芸にも興味を示し、特に落語や川柳を愛好した。留学後期には日本との親和性を見出したギリシアにも関心を寄せ、立教大学でギリシア語を学び、晩年は数多くの翻訳をものした。周作人は明治末期の日本での留学体験を通して、日本文化のみならず、欧米文化思潮、さらにはギリシアまで複眼的視野を獲得していたといえる。

以上のように、周作人の文学活動は長期かつ多岐にわたり、その影響は多くの作家、作品に及んでおり、中国近現代文学を研究するうえで周作人研究は極めて重要な位置を占めている。今回、その周作人について日本で初めて国際シンポジウムを開催できた意義は極めて大きく、その研究成果として論文集として上梓し、世に問うことにした次第である。

遺憾ながら、日中戦争期、周作人は北京に残留し、中国を侵略した日本に協力し、北京大学図書館長、文学院院长をつとめ、さらには汪兆銘政権下の華北政務委員会で教育督弁をつとめた。その歴史的責任は重い。だが、その責任の過半は周作人の盛名を政治利用しようとした日本が負うべきものである。今回のシンポジウムもまた過去の歴史問題を直視し、その反省を踏まえ、未来の日中両国の友好を理解と信頼のうえに築くことを目指すものであった。

日本では戦前の松枝茂夫先生による翻訳以来、木山英雄先生、飯倉照平先生など優れた先達の薫陶のもとに、長年にわたり周作人研究が行われてきた。だが、現在なお周作人が遺した作品及び翻訳の校訂整理はまだ不十分であり、日記及び書簡など基本年譜資料はまだ整理すべきものは数知れぬ状態にある。このため今回のシンポジウムでは「基本資料の発掘と整備」を主題とした。ここに結集した論文には未公開資料が多数含まれ、周作人研究のみならず、関連分

野にも裨益するところ大であると確信している。

日本に対する周作人の深い理解と愛情を知れば知るほど、日本人たる私たちが周作人を理解することは、日本人という未知の自己を再発見し、中国人という親しい他者を受け入れることにつながると考えてきた。ひとりでも多くの方に周作人の文学と思想に触れ、日中近代史に対する理解を深めていただければ幸いである。

末筆ながらご寄稿下さった内外の執筆者各位ならびに特集号刊行を支援して下さった早稲田大学商学同攻会に心よりお礼申し上げます。

2019年9月30日

小川利康